

# 年頭のご挨拶

Greetings of the New Year

副会長 堀 洋一

Vice-president Yoichi Hori



新年あけましておめでとうございます。

2020年の春に副会長を仰せつかり、任期は2年、つまり今年の春季大会で退任します。巻頭言を書かせてもらうのはこれが最後です。昨年3月に東京大学を定年退職、講座は藤本博志教授が継承しました。良くも悪しくも、クルマの電動化にエンジンがかかってきたこの時期に、幸せに退職、あるいは退任いたします。

4月から東京理科大学野田キャンパスに移り、「エネルギー・環境コース eモビリティシンポジウム」を始めました。錚々たる講師陣のおかげで好評です。また、電気学会と自動車技術会が仲良くなる仕組みを作りたい、と言ってきましたが、これも両学会の事務局や受け皿となる委員会のご尽力で、よい方向に進んでいます。

昨年は東京オリンピック・パラリンピックがなんとか開催され、菅義偉前首相が2050年のカーボンニュートラル(CN)を宣言しました。これはやはり大きいですね。コロナもやっと収束しそうで、元気の日常が戻ることを願っています。

年頭にあたり、技術開発においてわが国が改善すべき3点を述べ、遺言といたします。

## (1) 白黒つける習慣をやめる

日本人はなんでも白黒つけたがります。内燃機関車と電気自動車はどっちがCNになりますか？ 電池とキャパシタはどっちがいいですか？ 原子力ですか、再エネですか？…どちらにも価値があります。共存を認めず、二者を対立させてどちらかをつぶそうとします。選択と集中という、私の大嫌いな言葉がもっともらしくまかりとおります。日本人は多様性に弱いとよく言われますが、まっことそのとおりです。「まじめ過ぎる困ったちゃん」はもとより、みなさん絶対にやっていますから、胸に手をあてて考えてみてください。たいへんよくないことです。

## (2) 短期の成果を求めない

「やってよいことが書いてある」わが国のルール作りがこの根源にあると考えます。ルールブックには「やってはいけないこと」が書いてある。米国など諸外国とは正反対です。国の研究開発プロジェクトでも「やることは全部」書く必要があります。もし書いていないと、〇〇はやらないのか？と有識者が鬼の首をとったように言い、追記を要求します。そ

して「書いたことはやらなければならない」ことになります。これがいけない。年度末に完了していないと最低評価をくらって翌年の予算がゼロになるわけです。将来を見通す準備ができた、という超貴重な成果よりも、書いたことの達成率が重要なのです。これでは、だれもチャレンジングなことはしません。年度ごとに成果が見込めるこじんまりしたものだけになってしまいます。国プロまでこれでは困ります。

## (3) 棲み分けを求めない

どこかでよく似たプロジェクトを見つけてきて、あれとはどこが違うのか、と棲み分けを要求します。それが新規性、独創性だと勘違いしているのです。たくさんの人が似たことをやろうとするのは、その技術開発が重要であることの証左です。絞る必要はありません。それでも産学官の役割分担はあります。例えば、学者にビジネスモデルを描かせるな、と言いたいですね。描けないのです。だから大学でしか役に立たないのです。

とにかくなにか妙だな、と思ったら、保身のために迎合したりしないで、きちんと反論しましょう。綺麗な文書を作るのではなく、本当に意味のある技術開発をしなければなりません。手先のワープロだけで仕事ができるようになったらおしまいです。

最後にもう一つ。いろいろな場面で、高名な学識経験者の意見を聞きすぎではいけません。有識者の多くは自分の成功体験を自慢に思っていて、何にでも当てはめようとします。あなた老害になっていきますよ、と言ってくれる友人がいないのです。

以上、「やってはいけないこと」を書いてみました。それ以外は自由にやりましょう。今年がよい一年になるよう願っております。

1978年東京大学工学部電気工学科卒業、1983年同大学院博士課程修了。助手、講師、助教授を経て、2000年2月電気工学科教授。2002年10月生産技術研究所教授。2008年4月新領域創成科学研究科教授。2021年4月より東京理科大学教授。専門は、モーションコントロール、メカトロニクス、電気自動車の制御、ワイヤレス給電。IEEE(Life Fellow)、電気学会、自動車技術会、日本シミュレーション学会(以上はフェロー)。過去には、電気学会産業応用部門長、世界電動車両協会(WEVA)会長、現在は、日本自動車研究所(JARI)評議員、日本能率協会(JMA)モータ技術シンポジウム委員長、キャバシタフォーラム会長、次世代自動車振興センター(NeV)代表理事などをつとめている。